

平成 21 年度

病害虫発生予報第 4 号

平成 21 年 7 月 23 日

三重県病害虫防除所

515-2316 三重県松阪市嬉野川北町 530

TEL 0598-42-6365 Fax 0598-42-7568

ホームページ<http://www.mate.pref.mie.jp/bojyosyo>

目 次

	ページ
1. 向こう 1 か月の予報と対策	1
2. 作物別の状況	2
3. 発生時期・発生量（平年比）の予察根拠	7
4. 予察項目の見方	13
5. 今月のトピックス（長距離飛来性ウンカについて）	14
6. 気象のデータ	15
7. おしらせ	17

1. 向こう 1 か月の予報と対策

1) 普通作物

イネでは、斑点米カメムシ類、イネクロカメムシの発生量は**平年並**、穂いもち、紋枯病の発生量は**やや少**、白葉枯病、ツマグロヨコバイ、セジロウンカ、トビイロウンカの発生量は**少**と予想されます。

ダイズでは、吸実性カメムシ類およびハスモンヨトウの発生量は**やや多**と予想されますので、発生状況に注意して防除を行ってください。紫斑病の発生量は**やや少**、コガネムシ類の発生量は**少**と予想されます。

2) 果樹

カンキツでは、黒点病、ミカンハダニ、チャノキイロアザミウマの発生量は**平年並**と予想されます。かいよう病（中晩柑類）の発生量は**やや少**と予想されます。かいよう病（温州みかん）の発生量は**少**と予想されます。

果樹カメムシ類の発生量は、果樹園への飛来数は**やや少**と予想されますが、8月中旬以降、ナシ、カキでは、園地への飛来に注意してください。

3) 茶

チャでは、チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマの発生量は**平年並**と予想されます。炭疽病、カンザワハダニ、チャノコカクモンハマキの発生量は**やや少**と予想されます。またチャノコカクモンハマキの発生時期は**平年並**と予想されます。

4) 野菜

イチゴでは、炭疽病の発生量は**やや多**と予想されます。葉かき後の定期的な防除と、降雨後の防除を実施してください。

2. 作物別の状況

作物名	病虫害名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
			発生量	程度		7月	8月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
イネ	穂いもち	—	やや少	中	普通					1) 穂いもちが発生した圃場では特に注意してください。
	紋枯病	—	やや少	中	低					1) 前年発生の多かった圃場では注意してください。
	白葉枯病	—	少	小	低					1) 毎年発生の多い圃場では注意してください。
	斑点米カメムシ類	—	平年並	中	普通					1) 周囲より出穂の早い圃場では被害が集中します。 2) 時期によって優先するカメムシの種類が変わります。 3) 防除は穂揃期、乳熟期～糊熟期に行ってください。
	イネクロカメムシ	—	平年並	中	普通					1) 発生圃場では、これから被害が目立つようになります。 2) イネの株元から吸汁するため、稔実が悪くなり、減収となります。 3) 日中は株元に潜んでいるので、薬剤は株元までかかるようにしてください。

作物名	病虫害名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消長の一例				防除の注意事項		
			平年比	平年比		程度	平年比	7月	8月			
								下旬	上旬		中旬	下旬
イネ	ツマグロヨコバイ	—	少	小	低	成虫密度					1) 9月上旬頃までに収穫の終わる圃場では、実害はほとんどありません。	
	セジロウンカ	—	少	小	低	成虫密度					1) 本年は多飛来がありません。	
	トビイロウンカ	—	少	小	低	成虫密度					1) 本年は多飛来がありません。	
ダイズ	紫斑病	—	やや少	小	普通	発病密度					1) 自家採種などで紫斑病発生の恐れがあるときは防除が必要です。 2) 莢が形成され始めたら薬剤散布してください。	
	コガネムシ類	—	少	小	低	成虫密度					1) 薬剤防除は一斉防除が効果的です。	

作物名	病虫害名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生病消長の一例				防除の注意事項		
			平年比	平年比		程度	平年比	7月	8月			
								下旬	上旬		中旬	下旬
ダイズ	ハスモンヨトウ	—	やや多	中	普通					被害量	<ul style="list-style-type: none"> 1) 本年は早い時期から被害が出る可能性があります。 2) 白変葉を手がかりに早期発見に努め、若令幼虫期に防除してください。 	
	吸実性カメムシ類	—	やや多	中	普通					開花 ↓	<ul style="list-style-type: none"> 1) 薬剤散布は一斉防除が効果的です。 2) 開花終期から莢伸長期に防除してください。 3) 本県では、アオクサカメムシ、クサギカメムシ、イチモンジカメムシ等がよく見られます。 	
カンキツ	黒点病	—	平年並	小	普通	発病密度				<ul style="list-style-type: none"> 1) 感染源となる枯れ枝が増加していると思われます。薬剤散布を定期的を実施し、8月下旬まで感染防止に努めてください。 2) 引き続き、枯れ枝の切除に努めてください。 		
	かいよう病	—	温州少 中晩柑やや少	小 小	低 普通	発病密度				<ul style="list-style-type: none"> 1) 発病した枝・葉・果実を除去してください。 2) 高接樹や幼木については、ミカンハモグリガの防除も徹底してください。 3) 防風対策に努め、台風の接近が予想される場合には、直前に防除してください。 		
	ミカンハダニ	—	平年並	中	普通	成ダニ密度				<ul style="list-style-type: none"> 1) 高温で増殖しにくくなる時期なので、発生が少なければ当面防除の必要はありません。 2) 1葉当たりの雌成虫寄生数が0.5～1.0頭程度を目安に防除してください。 3) 防除が必要な場合は、同一系統の薬剤の連用を避けてください。 		

作物名	病虫害名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消長の一例				防除の注意事項
						7月	8月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
カンキツ	チャノキイロアザミウマ	—	平年並	中	普通					<ol style="list-style-type: none"> 寄生果率10%になった時を防除の目安にしてください。 7月以降は、寄生部位が果頂部に移ります。
果樹共通	カメムシ類	—	やや少	小	低					<ol style="list-style-type: none"> 飛来が見られない園では、防除の必要はありません。 樹園地（特にナシ、カキ）には局所的に飛来してきます。昨年発生が多かった園地周辺では、よく観察してください。 ナシ、ブドウの有袋栽培では、袋と果実が密着すると、袋の上から加害されることがあるので注意してください。
チャ	炭疽病	—	やや少	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> 三番茶芽の開葉初期に防除してください。 降雨時に新葉の展開していた園では感染している可能性が高いので、治療効果の高い薬剤で防除してください。 三番茶芽に感染すると翌年の伝染源にもなるので注意してください。
	カンザワハダニ	—	やや少	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> 高温により活動が停滞する時期なので、発生が少なければ当面防除の必要はありません。 防除が必要な場合、薬剤に対する抵抗性を獲得しやすいため、同一系統の薬剤の連用は避けてください。
	チャノミドリヒメヨコバイ	—	平年並	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> 三番茶芽の開葉初期に防除してください。 三番茶の生育期は発生が多くなるので注意してください。

作物名	病虫害名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消長の一例				防除の注意事項		
			平年比	平年比		程度	平年比	7月	8月			
								下旬	上旬		中旬	下旬
チャ	チャノキイロアザミウマ	—	平年並	中	普通					1) 三番茶芽の開葉初期に防除してください。 2) 三番茶の生育期は発生が多くなるので注意してください。		
	チャノココクモンハマキ	平年並	やや少	小	低					1) 第3世代幼虫の防除時期は、孵化直後～2齢幼虫期までで、第2世代成虫発生のピークの1週間後が防除適期です。		
イチゴ	炭疽病	—	やや多	中	普通					1) これからの高温期にかけて、葉かき後の定期的な防除と、降雨後の防除を徹底して行います。 2) 薬剤散布は、株元まで十分かかるよう、畝やベンチの両側からも散布します。 3) 罹病した株は、感染源にならないようすみやかに除去してください。 4) 灌水は、水滴が跳ね返らないようにしてください。		

3. 発生時期・発生量（平年比）の予察根拠

作物名	病虫害名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	穂いもち	—	やや少	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 1か月予報（7月17日発表）によると、気温は低くない予想（－） 2) 7月上～中旬の降水量は平年より少（－） 3) いもち病発生予察システム（BLASTAM、7月22日現在）によると、感染好適日が7月第1半旬から第2半旬にかけて広域的に出現（＋） 4) 巡回調査圃場（7月第2週）では、葉いもちの発生圃場率20.3%（平年43.1%）と少、上位葉への進展率0.7%（平年1.7%）とやや少の傾向（－） 5) 一般圃場では、発生量は少～平年並（概して少）（－） <p>考察：巡回調査結果およびこれまでの気象状況から、穂への感染の機会は少ないと考えられるため、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	紋枯病	—	やや少	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 1か月予報（7月17日発表）によると、気温は低くない予想（＋） 2) 巡回調査圃場（7月第2週）では、発生圃場率14.7%（平年10.8%）と多、被害株率1.6%（平年5.0%）と少の傾向（－） 3) 一般圃場では、発生量は無～平年並（概して少）（－） <p>考察：巡回調査結果および一般圃場の発生状況を重視して、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	白葉枯病	—	少	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 6月中旬以降、梅雨時期の多雨による浸冠水被害は無（－） 2) 巡回調査圃場（7月第2週）では、発生圃場率0%（平年1.2%）と平年並に少ない傾向（±） 3) 一般圃場では、発生量は無～少（概して少）（－） <p>考察：特に増加要因がなく、巡回調査結果と一般圃場の発生状況を考慮して、予想発生量は少と考えます。</p>
	斑点米カメムシ類	—	平年並	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 予察灯（松阪市・4月第1半旬～7月第3半旬）では、誘殺数はイネホソミドリカスミカメ130頭（平年29.7頭）と多、アカスジカスミカメ26頭（平年19.8頭）と多（＋） 2) 巡回調査（7月第2週）では、圃場および畦畔イネ科雑草すくい取りによる、斑点米カメムシ類成幼虫の発生地点率40.3%（平年35.6%）とやや多（＋）、成幼虫数2.1頭（平年5.4頭）と少（－）の傾向（±） 3) 一般圃場では、発生量は少～やや多（概して平年並）（±） <p>考察：巡回調査結果および一般圃場の発生状況を重視して予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病虫害名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	イネクロカメムシ	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 予察灯（松阪市・7月第1半旬～7月第3半旬）では、誘殺数は水田位置4頭（平年5.6頭）と平年並、畑位置136頭（平年70.4頭）と多（+）</p> <p>2) 巡回調査圃場（7月第2週）では、被害発生圃場率33.1%（6年平均16.4%）と多、被害株率6.2%（6年平均2.7%）と多の傾向（+）</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は少～平年並（概して平年並）（±）</p> <p>考察： 一般圃場の発生状況を重視して、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	ツマグロヨコバイ	—	少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯（4月第1半旬～7月第3半旬）では、誘殺数は松阪市で3頭（平年32.8頭）とやや少、伊賀市で1頭（平年68.8頭）および御浜町で0頭（平年8.1頭、4月第1半旬～7月第2半旬）と少、紀北町で10頭（平年1.1頭、4月第1半旬～7月第2半旬）と多の傾向（-）</p> <p>2) 巡回調査圃場（7月第2週）では、発生圃場率10.0%（平年30.4%）と少、払い落とし成虫数0.4頭（平年2.9頭）と少、同幼虫数4.0頭（平年8.1頭）と少（-）</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無～平年並（概して平年並）（±）</p> <p>考察： 予察灯および巡回調査結果を重視して、予想発生量は少と考えます。</p>
	セジロウンカ	—	少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯（4月第1半旬～7月第2半旬）では、誘殺数は紀北町で0頭（平年42.7頭）、御浜町で0頭（平年35.4頭）と少の傾向、松阪市（水田）で0頭（平年5.7頭、4月第1半旬～7月第3半旬）、伊賀市で0頭（平年1.4頭、4月第1半旬～7月第3半旬）と少の傾向（-）</p> <p>2) 巡回調査圃場（7月第2週）では、紀州における発生圃場率57.1%（9年平均52.2%）と平年並（±）、払い落とし成虫数2.8頭（9年平均8.4頭）と少の傾向、また県全体では発生圃場率8.4%（平年15.5%）と少、払い落とし成虫数0.4頭（平年4.2頭）と少の傾向（-）</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無～平年並（概して少）（-）</p> <p>4) 九州各県の病虫害防除所情報（7月5～15日頃発表）では、極多飛来を未確認（-）</p> <p>考察： 西南日本での発生状況から、予想発生量は少と考えます。</p>

作物名	病虫害名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	トビイロウンカ	—	少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯（4月第1半旬～7月第2半旬）では、誘殺数は紀北町で0頭（平年0頭）、御浜町で0頭（平年0頭）と少、松阪市（水田）で0頭（平年0.4頭、4月第1半旬～7月第3半旬）、伊賀市で0頭（平年0頭、4月第1半旬～7月第3半旬）と少の傾向（－）</p> <p>2) 巡回調査圃場（7月第2週）では、発生圃場率0.3%（平年0.1%）とやや多、払い落とし成虫数0.01頭（平年0.4頭）と平年並に少ない傾向（±）</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無～平年並（概して少）（－）</p> <p>4) 九州各県の病虫害防除所情報（7月5～15日頃発表）では、多飛来を未確認（－）</p> <p>考察： 予察灯、巡回調査結果、一般圃場の状況を重視して、予想発生量は少と考えます。</p>
ダイズ	紫斑病	—	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報（7月17日発表）によると、気温は低くない予想（－）</p> <p>2) 昨年11月巡回調査圃場における紫斑粒発生率は1.1%（5年平均0.1%）とやや多（＋）</p> <p>考察： 連作圃場では前年の被害残渣から伝染することが懸念されますが、今後の気象条件を考慮して、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	コガネムシ類	—	少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯（4月第1半旬～7月第3半旬）では、誘殺数はドウガネブイブイ230頭（平年260.8頭）とやや少、ヒメコガネ50頭（平年116.2頭）と少（－）</p> <p>2) 県予察圃フェロモントラップ（5月上旬～7月中旬）では、誘殺数はマメコガネ24頭（平年342.6頭）と少、ドウガネブイブイ14頭（平年55.3頭）と少、ヒメコガネ2頭（平年57.6頭）と少（－）</p> <p>考察： 予察灯およびフェロモントラップの状況から、予想発生量は少と考えます。</p>
	ハスモンヨトウ	—	やや多	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃フェロモントラップでは、7月上旬のピーク期間における誘殺数は平年に比べて多の傾向（＋）</p> <p>考察： フェロモントラップの状況と今後の増加を考慮して、予想発生量はやや多と考えます。</p>
	吸実性カメムシ類	—	やや多	<p>要因</p> <p>1) 予察灯（4月第1半旬～7月第3半旬）では、誘殺数はアオクサカメムシ318頭（平年63.8頭）と多、イチモンジカメムシ38頭（平年21.7頭）とやや多、クサギカメムシ4頭（平年42.3頭）と少（＋）</p> <p>考察： 予察灯の状況から、予想発生量はやや多と考えます。</p>

作物名	病虫害名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
カンキツ	黒点病	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報（7月17日発表）によると、平年に比べて気温は低くない予想（±）</p> <p>2) 樹勢の低下から、枯れ枝は多い傾向（+）</p> <p>考察： 大きな増減の要因はなく、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	かいよう病	—	温州少 中晩柑 やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報（7月17日発表）によると、平年に比べて気温は低くない予想（-）</p> <p>2) 県予察圃（7月中旬）では、発病葉率5.0%（平年12.0%）と少の傾向、発病果率14.2%（平年30.4%）とやや少の傾向（-）</p> <p>3) 巡回調査圃場（7月第2週）では、新葉における発病は温州みかんでは認められず、中晩柑では平均発病度0.6と平年並の傾向、果実における発病は中晩柑では平均発病度0.05とやや少の傾向（-）</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少～平年並（概してやや少）（-）</p> <p>考察： 大きな増減の要因はなく、一般圃場の発生状況を重視して、予想発生量は温州みかんは少、中晩柑類はやや少と考えます。</p>
	ミカンハダニ	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報（7月17日発表）によると、気温は低くない予想（-）</p> <p>2) 県予察圃（7月中旬）では、100葉当寄生虫数は、無防除区で11.1頭（平年18.2頭）とやや少の傾向、防除区で0頭（平年3.4頭）と少の傾向（-）</p> <p>3) 巡回調査圃場（7月第2週）では、新葉における平均寄生葉率は1.7%（平年8.7%）と少、1葉当平均寄生虫数は0.03頭（平年0.4頭）とやや少の傾向（-）</p> <p>4) 一般圃場では、発生量はやや少～平年並（概して平年並）（±）</p> <p>考察： 大きな増減の要因はなく、一般圃場の発生状況を重視して、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	チャノキイロアザミウマ	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃（7月上旬）では、粘着トラップへの誘殺数は10.1頭（平年2.6頭）とやや多の傾向（+）</p> <p>2) 県予察圃（7月中旬）では、100果当寄生虫数は、1.7頭（平年9.4頭）と少の傾向（-）</p> <p>3) 巡回調査圃場（7月第2週）では、被害果率は0%（平年1.3%）と平年並の傾向（±）</p> <p>4) 一般圃場では、発生量はやや少～平年並（概して平年並）（±）</p> <p>考察： 大きな増減の要因はなく、一般圃場の発生状況を重視して、予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病虫害名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
果樹 共通	カメムシ類	—	やや少	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 予察灯（御浜町：7月1日～7月10日）では、誘殺数はチャバネアオカメムシ 484 頭（平年 481 頭）と平年並の傾向、ツヤアオカメムシ 23 頭（平年 9 頭）とやや多の傾向（±） 2) 予察灯（畑・松阪市：4月1日～7月15日）では、誘殺数はチャバネアオカメムシ 285 頭（平年 687 頭）と少、ツヤアオカメムシ 177 頭（平年 154 頭）と平年並（－） 3) フェロモントラップ（4月1日～7月16日）では、チャバネアオカメムシ誘殺数は、山地（津市白山町川口）で 1,210 頭（平年 1,503 頭）とやや少、中間地（津市白山町二本木）で 1,527 頭（平年 2,035 頭）とやや少、平坦地（松阪市嬉野川北町）で 55 頭（平年 449 頭）と少（－） 4) 巡回調査圃場（7月第2週）では、圃場への飛来は未確認（－） 5) 一般圃場では、少～平年並（概してやや少）（－） <p>考察： 今後、8月中旬以降、カキ園等に飛来する可能性があるため、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	炭疽病	—	やや少	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 1か月予報（7月17日発表）によると、気温は低くない予想（±） 2) 巡回調査圃場（7月第2週）では、1㎡当平均発病葉数は 1.6（平年 3.0）とやや少（－） 3) 一般圃場では、発生量は少～平年並（概してやや少）（－） <p>考察： 大きな増減の要因はなく、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	カンザワハダニ	—	やや少	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 1か月予報（7月17日発表）によると、気温は低くない予想（－） 2) 県予察圃（7月中旬）では、寄生葉率は 2.0%（平年 14.5%）と少、1葉当寄生虫数は 1.64 頭（平年 0.47 頭）と多（±） 3) 巡回調査圃場（7月第2週）では、寄生葉率は 0.3%（平年 1.6%）と少、一葉当たり寄生頭数は 0.003 頭（平年 0.046 頭）とやや少の傾向（－） 4) 一般圃場では、発生量は少～平年並（概して少）（－） <p>考察： 大きく増える要因はないため、予想発生量はやや少と考えます。</p>
チャノミドリヒメ ヨコバイ	—	—	平年並	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 県予察圃吸引粘着トラップ（6月第2～第6半旬）では、誘殺数は 12 頭（平年 14.6 頭）と平年並（±） 2) 巡回調査圃場（7月第2週）では、たたき落とし平均虫数は 1.7 頭（平年 1.9 頭）とやや少（－） 3) 一般圃場では、発生量は平年並（±） <p>考察： 大きな増減の要因はなく、一般圃場の発生状況を重視して、予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病虫害名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
チャ	チャノキイロアザミウマ	—	平年並	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃吸引粘着トラップ（6月第2～第6半旬）では、誘殺数は10,104頭（平年4,377.9頭）と多（+）</p> <p>2) 巡回調査圃場（7月第2週）では、たたき落とし平均虫数は15.8頭（平年24.9頭）と少（-）</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は平年並（±）</p> <p>考察： 大きな増減の要因はなく、一般圃場の発生状況を重視して、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	チャノコカクモンハマキ	平年並	やや少	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃フェロモントラップ（6月第1～7月第3半旬）では、誘殺時期の傾向は平年並（発生時期±）</p> <p>2) 県予察圃フェロモントラップ（6月第1～7月第3半旬）では、誘殺数は248頭（平年299.1頭）とやや少（-）</p> <p>3) 巡回調査圃場（7月第2週）では、1㎡当巻葉数は0.0（平年0.45）と平年並の傾向（±）</p> <p>4) 一般圃場における発生量は平年並（±）</p> <p>考察： 大きな増減の要因はなく、予想発生量はやや少と考えます。</p>
イチゴ	炭疽病	—	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報（7月17日発表）によると、気温は低くない予想（±）</p> <p>2) 巡回調査圃場（7月第2週）では、平均発病株率は0.5%（平年0.25%）とやや多の傾向（+）</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は平年並～やや多（概してやや多）（+）</p> <p>考察： 現在の発生状況及び気象条件を考慮して、予想発生量はやや多と考えます。</p>

4. 予察項目の見方

1) 「作物別の状況」の見方

発生時期（平年比）： 平年の発生月日からの差を「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階評価で予測します。ただし、発生時期が毎年大きく変化する病害虫では、日数の基準が下記より大きくなります。発生時期を予察する意義の小さい病害虫では予察しません。

日数		-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	1	2	3	4	5	6	
評価		早	やや早		平年並				やや遅			遅			

発生量（平年比）： 発生密度の平年値からの差を「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階評価で予測します。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

		平年値 ↓				
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少	やや少	平年並		やや多	多

発生量（程度）： 発生程度を「小、中、大、甚」の4段階評価で予測します。評価の基準値は病害虫毎に異なりますが、大雑把には、「見た目の多さ・少なさ」です。甚になるほど見た目は多くなり、小になるほど見た目は少なくなります。「発生量（平年比）」と比べることによって、「平年並に発生程度が小さい」「発生程度は大きい平年並の発生量である」「平年より多いが、発生程度は小さい」「平年よ

りやや少ないが、依然として発生程度は中くらいである」等のように判断してください。

小	中	大	甚
---	---	---	---

要防除圃場率（平年比）： 防除の必要性の目安を「低、普通、高」の3段階評価で予測します。「普通」であれば、県下の大半の圃場では防除暦に沿った通常の防除をしていればいいと予想されます。「高」であれば、防除時期の見直しや追加防除などが必要な圃場の割合が相当増加すると予想されます。「低」であれば、防除回数を減らせるか防除しなくても済むような圃場の割合が相当増加すると予想されます。

低	普通	高
---	----	---

発生消長の一例： 発生予報は向こう1か月の予報ですが、その前後を合わせて40日ほどの病害虫の発生消長の一例をグラフで示します。大まかな目安として利用してください。

防除の注意事項： 向こう1か月の病害虫の特性と防除に関する説明です。

2) 「発生時期・発生量（平年日）の予察根拠」の見方

(±)：平年並の要因

(+)：発生量増加または発生時期遅延の要因

(-)：発生量減少または発生時期早期化の要因

5. 今月のトピックス 「長距離飛来性ウンカについて」

1 空飛ぶウンカ

イネの重要害虫であるセジロウンカとトビイロウンカは国内では越冬できません。毎年中国南部やフィリピンの方から飛んできます。梅雨頃以降の前線に発達する気流に乗って、日本まで吹き飛ばされてくるのです。海に落ちず、日本までたどり着いた成虫の大群は、水田で1、2世代を経て爆発的に増殖し、イネを枯らすほどの被害をもたらすことがあります(図1)。



図1 トビイロウンカによる坪枯れ

2 飛来予測

飛来予測のシミュレーションが発表されていて(図2)、当所でも予察根拠に使っています。本県まで拡散が予測され、さらにその時期に九州を中心とする西日本の予察灯で大量(5日当り千~万頭単位で)に誘殺されれば、本県にも飛来した可能性が高いとみなします。

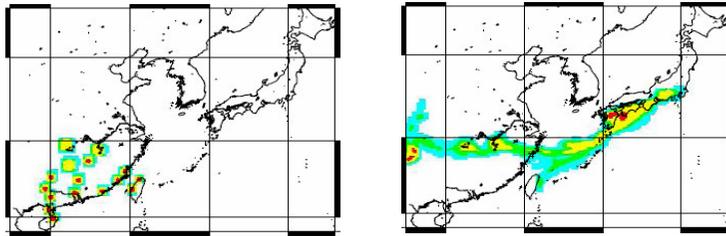


図2 ウンカ類飛来予測;左図の地域から2009年6月30日に飛び立てば、2日後には右図のように拡散する(農研機構・中央農研・九州沖縄農研・原研 <http://agri.narc.affrc.go.jp/indexj.html> より改変)

3 本県の実態

九州ではよく大発生しますが、三重県まで大群でやってくることはあまりありません。当所の発表する発生予察に従い、必要な年だけ防除してください。ただし、風の吹き溜まりのような谷や山間の地形では、特定の圃場にたびたび被害の出ることがあります。また、太平洋に面する県南部では、北部よりよく発生する傾向があります。

4 発生消長予測

よほどの大群でない限り、実被害が出るのは水田に定着してから2世代目の成幼虫からです(飛来数がそれ程多くなければ3世代目から)。飛来日が早い場合は、遅い作付けでは3世代目による被害が出やすくなります。

表1で、トビイロウンカの大群が6月10日に来たとすると、7月12日の数日過ぎから2世代目の幼虫が加害を始めます。大半のコシヒカリでは次の世代が出る頃には収穫を終えていることになります。

表1 発生消長予測(左 セジロウンカ、右 トビイロウンカ)
(有効積算温度の考え方を熊野市日平均気温平年値を使用して計算)

飛来日	飛来後第1世代羽化日	第2世代羽化日	第3世代羽化日
6/10	7/8	8/1	8/24
6/20	7/16	8/8	8/31
6/30	7/23	8/15	9/8
7/10	8/1	8/24	9/18
7/20	8/10	9/2	9/30

飛来日	飛来後第1世代羽化日	第2世代羽化日	第3世代羽化日
6/10	7/12	8/6	8/30
6/20	7/20	8/14	9/8
6/30	7/27	8/20	9/16
7/10	8/4	8/28	9/25
7/20	8/14	9/8	10/10

今年は7月10日現在で多飛来が認められていません。つまり、早い作付けならもう安心ということです。

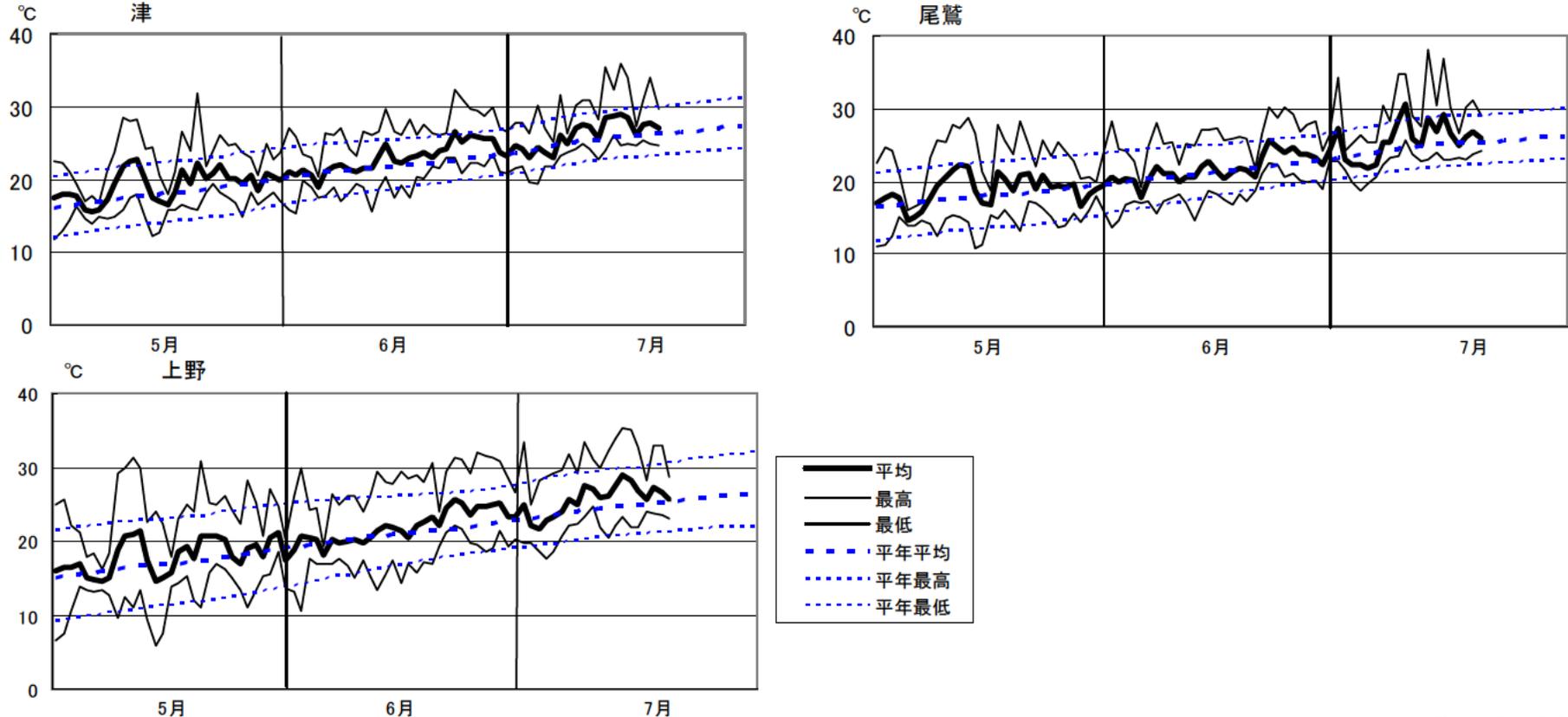
6. 気象のデータ

東海地方1か月予報 (平成21年7月17日 名古屋地方気象台発表)

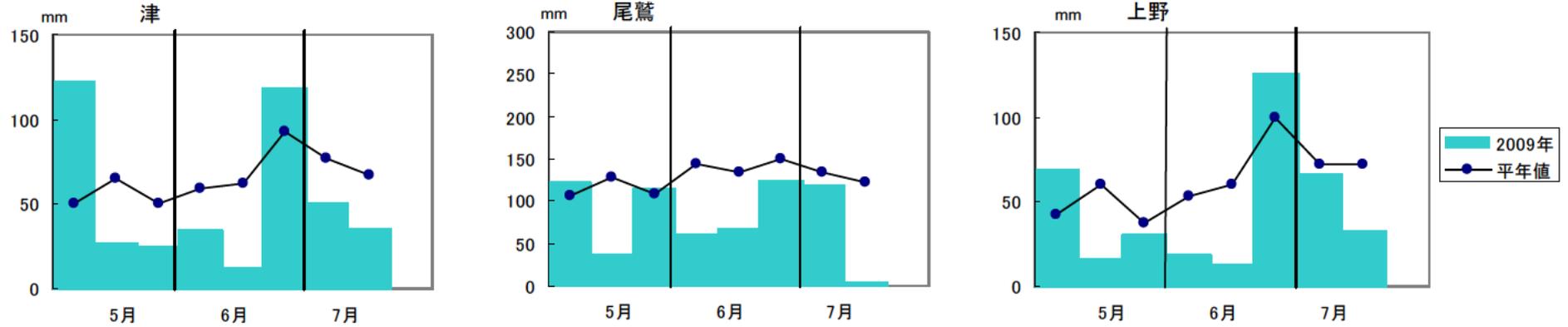
東海地方の向こう1か月は、期間のはじめは気圧の谷や前線の影響を受けて、平年と比べ曇りや雨の日が多く、その後は平年と同様に高気圧に覆われて晴れる日が多い見込みです。

1週目 (7月18日～24日)	気圧の谷や梅雨前線の影響により曇りで雨の降る日がありますが、期間の前半は晴れ間の広がる日もある見込みです。	晴れ日数の平年値 約4日
2週目 (7月25日～31日)	高気圧に覆われて平年と同様に晴れる日が多いですが、南からの湿った空気の影響を受ける日もある見込みです。	同 約4日
3～4週目 (8月1日～14日)	高気圧に覆われて平年と同様に晴れる日が多いですが、南からの湿った空気の影響を受ける日もある見込みです。	同 約9日

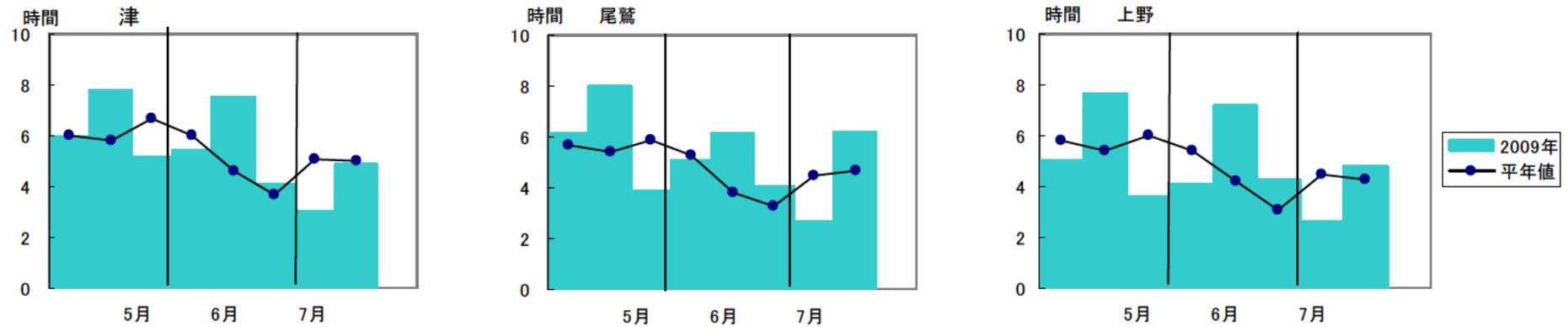
気温の日別推移 (気象庁発表データ <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php> から作成)



降水量の旬別推移 (気象庁発表データ<http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php>から作成)



日照時間の旬別推移 (気象庁発表データ<http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php>から作成)



7. おしらせ (前回と異なる項目には **NEW** の印があります)

1) 発表日 **NEW**

本年度の病害虫発生予報は次の予定で発表します。

第1回 4月23日 (発表済み)	第2回 5月28日 ()
第3回 6月25日 (発表済み)	第4回 7月23日 (今回)
第5回 8月27日 (木)	第6回 10月22日 (木)
第7回 3月18日 (木)	

2) 利用方法

全部または一部をコピーして回覧・配布にご利用ください。ただし必ずページの右下にある「三重県病害虫防除所」の文字が入るようにしてください。

病害虫防除所ホームページには、この予報をはじめとして、不定期に発表される警報、注意報、特殊報、技術情報や、各種のグラフ、写真も載っています。下記のアドレスからお入りください。

<http://www.mate.pref.mie.jp/bojyosyo/>

このホームページはフリーリンクです。リンクする場合、事前の承諾申請等は不要ですが、事後で結構ですのでメールにてご一報いただくと幸いです。

3) 本冊子の利用の手引き書

本冊子の見方を説明した「病害虫発生予報利用の手引き」があります。下記のアドレスからお入りください。

http://www.mate.pref.mie.jp/Bojyosyo/files/h21yohotebiki_.pdf

4) メール配信サービス

予報、警報、注意報、特殊報、技術情報が発表されたときに、ホームページに掲載されたという「掲載通知」を電子メールでお知らせしています。このメールの配信を希望される方は、下記のアドレスからお申し込みください。

<http://www.mate.pref.mie.jp/bojyosyo/merumaga.htm>

5) 農薬登録状況の最新情報

農薬の販売や使用に当たっては、農薬登録上の制限があります。農薬の使用時はラベルをよく読んでください。次のインターネットサイトでは、最新の農薬登録状況が確認できます。

独立行政法人農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報」

<http://www.acis.famic.go.jp/searchF/vtllm000.html>